

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会放射性物質対策部会
作業グループ（食品分類等）における検討状況について
—規制値設定対象核種及び食品分類についての検討（概要）—

＜これまでの検討内容＞

○規制値設定対象核種の考え方について

- ・測定機関や測定機器の数、測定に要する時間等の観点から、規制値は放射性セシウム（セシウム134+137）を対象として設定することが妥当であり、その他の放射性核種による影響は、食品中における放射性セシウムとの比（スケーリングファクタ）を用いることによって考慮する。
- ・環境中の放射性ヨウ素は既にかなり減少していると考えられるが、まだ海草で検出されており、取り扱いについて議論を行う必要がある。

○検討のための情報について

- ・スケーリングファクタは、原子力発電所からの放射性核種の放出状況や環境モニタリングデータ、環境媒体（耕作地土壌、海水等）から農畜水産物への放射性核種の移行挙動に関するこれまでの研究成果等によって導出される推定値と、実際の食品中の各種の放射性核種濃度の実測値を組み合わせることによって把握する必要がある。
- ・特に海産物については、放射性核種の海洋に対する放出状況に関する情報が少ないことや、海洋中の挙動が元素によって異なること等から、実測値を得ることが重要である。

○食品分類等について

- ・ 食品加工（濃縮、除去、乾燥等）について、スケーリングファクタの変化の観点から調査し、検討する必要がある。
- ・ 食品形態と摂取量の関連性等について調査し、適切な食品分類と食品形態（乾燥状態か水戻しした状態か等）について検討する必要がある。
- ・ 調理等を経て最終的に摂取される形態についての検討が必要である。
- ・ 食品分類等の議論は、線量評価グループと一緒に検討する。

○その他

- ・ 比較的短半減期の放射性核種は徐々に減少すること等を考慮し、規制値を経時的に変更する必要性についても検討する必要がある。
- ・ セシウムのエイジング効果（時間の経過に伴い土壌から農作物への移行係数が小さくなる現象）についても考慮しておく必要がある。
- ・ これまでの食品衛生法における汚染物質の規制値の設定方法を参考にすべきである。

＜今後の検討事項＞

○検討対象とする放射性核種とスケーリングファクタについて

- ・ 放射性核種のこれまでの放出状況及びモニタリングデータの整理と検討
- ・ 環境中における放射性核種の移行挙動に関する研究のレビューと検討
- ・ 食品中の放射性核種濃度の実測と評価
- ・ 比較的短半減期（数十日から数年程度）の放射性核種の取扱いの検討

- ・セシウムのエイジング効果（時間の経過に伴い土壌から農作物への移行係数が小さくなる現象）等の考慮
- ・上記検討による規制パターン案の作成
（スケーリングファクタや安全係数の設定、時間経過に伴う変更の必要性、長期的な監視の必要性等）

○食品分類等について

- ・食品加工（濃縮、除去、乾燥等）による放射性核種濃度の変化（スケーリングファクタの変化を含む）に関する検討
- ・規制を行う食品形態に関する検討
- ・食品分類と対象食品（少量摂取食品に関する検討を含む）の検討
（線量評価グループと合同で検討）

放射性物質対策部会 作業グループ（食品分類等）

氏名	フリガナ	現職
明石真言	アカシ マコト	独立行政法人 放射線医学総合研究所理事
青野辰雄	アヲノ タツオ	独立行政法人 放射線医学総合研究所放射線防護研究センター運営企画ユニット防護ネットワーク推進室調査役
伊藤伸彦	イトウ ノブヒコ	北里大学獣医学部長
須賀新一	スガ シンイチ	JAEA原子力科学研究所原子力人材育成センター非常勤講師（元JAEA原子力科学研究所原子力研修センター講師）
高橋知之	タカハシ トモキ	京都大学准教授（京都大学原子炉実験所）
田上恵子	タカミ ケイコ	独立行政法人 放射線医学総合研究所放射線防護研究センター廃棄物技術開発研究チーム主任研究員
塚田祥文	ツカダ ヒロフミ	財団法人 環境科学技術研究所環境動態研究部主任研究員
松田りえ子	マツダ リエコ	国立医薬品食品衛生研究所食品部長
渡邊敏明	ワタナベ トシアキ	兵庫県立大学環境人間学部食環境解析学教室教授